

児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造と発達への影響：機能的アプローチによる検討

著者	村上 達也
内容記述	この博士論文は内容の要約のみ公表しています
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6972号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123519

[博士論文概要]

児童期中・後期におけるアタッチメントの 内的作業モデルの構造と発達への影響 —機能的アプローチによる検討—

平成 25 年度

村上 達也

筑波大学大学院人間総合科学研究科
心理学専攻

本論文の目的は、児童期中・後期においてアタッチメントの内的作業モデルがどのように構造化されているのか、および児童期中・後期のアタッチメントの内的作業モデルがどのように発達に影響を及ぼすのかについて、実証的検討を行うことであった。この検討を行うにあたっては、アタッチメント対象を母親、父親、友だちなどというように関係性に基づいて想定する関係性カテゴリアプローチではなく、アタッチメント機能を果たしている人をアタッチメント対象とする機能的アプローチを採用した。

アタッチメント理論は、ヒトがどのように発達するのかについて理解するための、最も影響力のある概念的枠組みの一つである。そのため、アタッチメント理論への関心は非常に高く、多くの実証研究が行われている。しかしながら、発達期ごとに研究を概観した場合、アタッチメント研究は、乳幼児期と青年・成人期を対象としたものが多く、その間の時期である児童期を対象とした研究は、国内外を問わず、ほとんど行われてこなかった。

そこで近年、児童期中・後期のアタッチメント研究が盛んに行われるようになってきた。なぜなら、この時期は、対人関係の発達や認知能力の発達に伴う、アタッチメントの一大転換期であるからである。また、児童期以降に頻発する問題行動や不適応行動に関する予

防的な観点からも、児童期中・後期のアタッチメントの重要性が指摘されているからである。そこで、本論文では、児童期中・後期のアタッチメントを研究した。

児童期中・後期のアタッチメントを研究するにあたって、まず問題となったのは“児童期中・後期のアタッチメント対象は誰であるのか”である。なぜなら、アタッチメントは特定他者との間の情動調整システムであり、特定の他者とは誰なのか、が定義上、重要な問題であるためである。そこで本論文では、第1の目的として、児童期中・後期において、誰がアタッチメント対象なのかを検討することとした。また、アタッチメント対象の捉え方について、従来用いられてきた関係性カテゴリーアプローチの問題を指摘し、個人にとってのアタッチメント機能の充足を重視する、機能的アプローチを採用した。

機能的アプローチを採用することで、人が複数のアタッチメント対象を持つと考えることが可能になった。なぜなら、機能的アプローチならば、ある対象はアタッチメント機能を十全に果たし、ある対象はそれには及ばないが、ある程度機能を果たしている、というように程度の問題として、複数のアタッチメント関係を検討することが可能になるためである。アタッチメント理論における中核概念である内的作業モデルは、“自分にとってのアタッチメント対象は誰であるのか、そのアタッチメント対象からどのような応答が期待できるのかという主観的な考え”と定義される。したがって、ヒトが複数のアタッチメント対象を持つからには、それぞれの対象に対して、内的作業モデルが形成されると考えられる。しかし、それら各対象に対する個別の内的作業モデルはどのように構造化されているのかについて、十分に研究がされていない。そこで本論文では、第2の目的として、児童期中・後期の内的作業モデルの構造について検討することとした。また、アタッチメント理論の中心的な主張は、アタッチメントの内的作業モデルの質が後の発達を規定するというものである。したがって、児童期中・後期のアタッチメントの内的作業モデルの質が、後の発達にどのように影響を及ぼすのかを明らかにする必要があると考えられる。そこで本論文では、第3の目的として、児童期中・後期のアタッチメントの内的作業モデルがどのように発達に影響を及ぼすのかについて検討することとした。第2と第3の目的のために、理論的な検討から、階層的組織化モデル、統合的組織化モデル、独立的組織化モデルの三つの仮説モデルが生成され、各モデルの予測について論じられた。

以上、本論文では、児童期中・後期のアタッチメントに関して、アタッチメント対象は誰なのか、アタッチメントの内的作業モデルはどのように構造化されているのか、アタッチメントの内的作業モデルはどのように発達に影響を及ぼすのか、の3点を検討した。

実証的検討部において、まず、機能的アプローチに基づくアタッチメント対象の検討が行われた。研究 1 では、機能的アプローチに基づく対象指名尺度の作成を、研究 2 では、機能的アプローチに基づく機能尺度の作成を行い、児童期中・後期のアタッチメント対象を検討した。また、研究 3 では、児童期中・後期のアタッチメント対象の人数とその関係性の検討を行った。そして、研究 4 では、児童期中・後期の特徴の一つであるアタッチメント対象の変化について検討した。これらの研究の結果、まず機能的アプローチに基づくアタッチメント対象の内訳が明らかにされた。児童期中・後期には、個人によって異なる、複数の多様な関係性がアタッチメント対象に成りうることが示された。また、この時期の子どもは、平均して 3 人程度のアタッチメント対象を持つことが明らかにされた。さらに、アタッチメント対象が家族内の関係性から家族外の関係性へ移行しつつあることが示された。村上・櫻井（2011a）では、アタッチメント対象の人数が増加することが示されていることを踏まえると、この時期はアタッチメントの範囲が拡大し、かつ、アタッチメント機能を最も果たす対象が家族内の関係性から家族外の関係性へ移行するという、アタッチメント対象の移行と拡大の時期であるといえる。このような個人によって異なる、複数の多様な関係性がアタッチメント対象になることは、理論的には想定されていたものの、関係性カテゴリアプローチでは捉えることができなかった。機能的アプローチを採用した本論文によって、児童期中・後期における複数のアタッチメント対象の内訳およびその移行と拡大が明らかになったといえる。

次に、機能的アプローチに基づいて同定されたアタッチメント対象に対する内的作業モデルの構造が検討された。研究 5 では、内的作業モデルの構造に関する三つの仮説モデルのうち、どのモデルが最もデータにあてはまるかを検討した。その結果、児童期中・後期の内的作業モデルの構造を説明するのには統合的組織化モデルが最もあてはまりの良いモデルであることが明らかにされた。ただし、研究 5 では探索的にモデル検討を行ったために、測定した変数では統合的組織化モデルを十分に表現できなかった。そこで、研究 6 では、研究 5 で示された全体規定モデルと元々の統合的組織化モデルの表現である個別統合モデルの比較を行った。その結果、児童期中・後期の内的作業モデルの構造を説明するのに、個別統合モデルが最もあてはまりの良いモデルであることが明らかにされた。これらの検討の結果から、この時期の内的作業モデルの構造は、統合的組織化モデルのように構造化されていることが明らかにされた。

そして、機能的アプローチに基づいて同定されたアタッチメント対象に対する内的作業

モデルがどのように発達に影響を及ぼすのかについて検討された。研究 7 では、短期縦断調査を行い、内的作業モデルが短期的にどのように発達に影響をするかを検討した。三つの仮説モデルを比較検討した結果、児童期中・後期の内的作業モデルは統合的組織化モデルが示すように発達に影響を及ぼすことが明らかにされた。研究 8 では、回顧法調査を行い、内的作業モデルが長期的にどのように発達に影響するかを検討した。青年期前期、中期、後期に対する発達の影響について、三つの仮説モデルを比較検討した結果、児童期中・後期の内的作業モデルは統合的組織化モデルが示すように発達に影響を及ぼすことが明らかにされた。これらの検討の結果、児童期中・後期の個別対象に対する内的作業モデルは全体的モデルとして統合され、その統合されたモデルを介して、後の発達に影響することが明らかにされた。

以上、本論文から得られた知見を集約し、“機能的アプローチに基づく、児童期中・後期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造と発達への影響モデル”が作成された。このモデルでは、まず、アタッチメント機能を十分に果たしている人物がアタッチメント対象とされた。そして、それらの人物に対する個別の内的作業モデルは、一つの統合的な内的作業モデルとして統合され、さらに、その統合された内的作業モデルが、後の発達に影響を及ぼすとされた。

本論文の意義として、以下の点が挙げられる。まず、機能的アプローチを採用することにより、ある個人にとってのアタッチメント対象を扱うという個人に焦点を当てた研究が可能になった。これによって、単親家庭や児童養護施設等で育てている子どもを対象とした研究において、研究者が想定した母親、父親という対象との関係性の質ではなく、個人にとっての重要な対象との関係性の質を捉えることが可能になり、大きな貢献が期待できる。さらに、最終的に導かれたモデルから、既存の関係性を良くしていくという観点のみならず、子どもが新たな関係性の中でより良い関係を選択していく、もしくは、周囲の人間が子どもにとっての良い対象になる、という観点から、内的作業モデルの変容可能性を議論することが可能になった。最後に、環境的要因を重視しながらも、結局の所、初期の母親との関係性の質がその後の発達を規定するという固定的な発達観を提出してきた先行研究に対し、実証データをもって、今その人が重要だと思っている関係性の質が後の発達を規定するという、アタッチメント理論が本来持つ、環境要因を重視する流動的な発達観を提出することができた。これらの点は、本論文のアタッチメント理論に対する大きな貢献であろう。

(3996/4000 字)